

第4分科会 一鳥取県

豊かな心を育てる保育

一日々の生活の中で、ともに育ち合うことを目指して

発表園： 認定こども園 鳥取第四幼稚園
指導助言者： 高橋千枝先生 | 東北学院大学文学部 准教授
司会者： 濱本智子 | 認定こども園 鳥取第四幼稚園
発表者： 吉田美穂 | 認定こども園 鳥取第四幼稚園
記録者： 中村聖子・山本絵梨 | 認定こども園 鳥取第四幼稚園



1 発表の概要

(1) はじめに

本園のめざす子ども像
本園の概要

(2) 研究のテーマと設定理由

本園の実態
設定理由

本園は平成24年度より、幼稚園から幼保連携型認定こども園としてスタートした。このことにより、0歳から小学校就学前までの園児がともに生活する場へと変化した。開園当初は新しいこども園のスタイルに職員が戸惑いを感じ、幼児部と乳児部はそれぞれの活動をすることに一生懸命で、子ども達の発達に応じた生活のつながりが上手くいかない部分があること、異年齢での関わりが少ないことに気がついた。0～5歳児のいる認定こども園の良さを生かした保育を展開したいと職員同士が話し合い、行き来しあうことで繋がりをもつようにしたところ、職員が一人ひとりの子どもを理解することができ、次年度の学年の移行が子ども達にとって無理なく行えるようになってきた。また、職員同士が繋がることで子ども達が様々な学年の友達に関心を持ち、関わる姿も見られるようになり、その中で育つ子どもの力があることを感じるきっかけとなった。

園生活の遊びの中で自然な異年齢の交流が生まれるための環境構成や教師の援助を考えると共に、子どもの育ちや関わりを教師間で話し合い、豊かな心を育てていくために日々の保育をどう設定していけばよいのかを考え、子ども達がともに育ちあうことができるよう研究を進めていくこととした。

(3) 研究の取り組み

研究の経過

事例「さくらぐみレストランであそぼう」

○対象年齢 5歳児 さくら組 24名、3歳児 たんぽぽ組 26名

○ねらい 5歳児 ・クラスの友達と共通の目的をもち、年下の友達のことを考えながら遊ぶことを楽しむ。

・秋の自然物を使い、工夫したり考えたりしながら遊びに取り入れて遊ぶ。

3歳児 ・いろいろな友達や教師と一緒に喜んで遊ぶ。

・砂遊びの面白さや秋の自然物を使った遊びを楽しむ。

○活動に対する思いや流れ

異年齢グループの5歳児さくら組と3歳児たんぽぽ組は、一緒に散歩に出かけて、木の実や落ち葉拾いをしたり、拾ってきた自然物を使って砂場で遊んだりしながら交流を広げていった。その中でも、型抜きやバケツを使ってごちそう作りを楽しんだり、中庭に生えている草を採ってきてデコレーションしたりする子どもの姿が多く見られた。そこで、今までの砂場での遊びを広げながら、異年齢での関わりが深まる活動の一つになればと思い、秋の自然物を使いながら、砂場でのレストランごっこをすることを計画した。

*実際の動画を入れながら、活動内容・子どもの姿

○考察〈交流を通して〉

6月、7月の反省を踏まえ、今回は年長組1クラス、年少組1クラスでの交流を行った。交流するクラスの規模を小さくすることで子ども同士の交流がより密になり、深まったと感じた。適度な年齢差があることで、年長児は年少児のことを考えながら遊びを工夫したり、年少児は年長児の姿をモデルとし真似をしたり憧れの気持ちをもったりしながら遊びを進めることができた。また、遊びを継続して行うことで、他のクラス、学年も自然に遊びに参加し、交流に広がりが見られたことは良かった。

(4) 異年齢の関わりの内容

0、1歳児

- 乳児部の子どもとの交流は、主に朝の自由時間を利用し、以上児の行きたい子どもが自由に行き来。
- 0、1歳児は、最初は保育教諭の側で過ごし、年長児の姿をじっと見ていたが、次第に年長児に子どもも抱っこをしてもらうことで泣き止んだりするようになった。
- 年長児が遊びに来ることに慣れ、0、1歳児がバンザイをして喜んだり、抱っこを要求したりするようになった。年長児も気持ちを読み取りながら接する姿が見られるようになった。また、園庭や中庭で出会うと、お互いに歩み寄り声をかけられ、嬉しそうな表情を見せるようになった。

2歳児

- 初めから年上の友達に関わってもらうことを喜んでいる子どもと、緊張して一緒に遊びたがらない子どもがいた。繰り返し交流を行うことで手を繋いでもらうと嬉しい、何かしてもらえたことが嬉しいと関わる喜びを感じるようになった。以上児は、一生懸命関わろうとしていたが、自我が芽生えた2歳児に拒まれることもあり、相手のことを考えどう声をかけたらいいのか、どうしたら一緒に遊べるのか、考えながら関わろうとする子どもの姿が見られた。
- 以上児と一緒にプール遊びや泥んこ遊びを一緒に楽しみ、ダイナミックな遊びにびっくりしていた子どももいたが、楽しそうに遊んでいる姿につられて、水が苦手だった子どもが抵抗なく入り、遊べるようになった子どももいた。
- マーチングや発表会の様子を見る中で、見たことのない楽器を鳴らす姿に見入っていたり、曲に合わせて手拍子をしたりする姿が見られた。また、自分達の発表の練習を見てもらうことで張り切って表

現する姿が見られた。

- 年上の友達と関わる中で甘えられる嬉しさを感じたり、してもらったことに対する喜びを感じたりすることが出来た。自分には出来ない、年上の友達だからこそできることに憧れの気持ちを持ち、また、年上の友達も自分の存在を認められることで自信を身につけ、お互いに刺激し合える関係が出来た。

3. 4. 5歳児

- 3歳児は交流を始めた頃は、年上の友達にお世話をしてもらうことに喜びを感じていたが、自分でできることが増えてくると、年上の友達がしていることをモデルに真似をしてやってみたり、教えてもらったりする姿に変化していった。自分でできたことが自信となり、さらに園生活や遊びを楽しんだり、自分でやってみようとしたりする気持ちに繋がった。
- 4歳児は0, 1歳児に関心を持ち始めたが、関わり方が分からず年中同士で遊んだり、0, 1歳児の教師との関わりを楽しんだりしていた。
- 4歳児は自分でできることが増え、自分の力で頑張りたい気持ちをもつようになった。しかし、お世話の仕方にも戸惑いを感じ、交流をしていくことに難しさがあった。遊びも自分達で進めるのがおもしろかったり、自分のやりたい遊びを深めたい時期にあり、なかなか相手を思いやって遊びを進めることが難しかった。しかし、年長児のしている遊びの内容や、お世話の仕方をよく見ており、それを真似し、さらに自分達の遊びや生活の中に活かしていた。年長組に進級すると自ら進んで交流へ出かけたり、自分達で考えて年下の子ども達に関わったりしようとする姿が見られている。昨年の年長児の姿をモデルとしながら、自分達がお兄さん、お姉さんとして交流することを楽しみにしていたように思う。
- 5歳児が2歳児午睡の用意、寝かしつけを年長児が手伝い、パジャマの着方や服の畳み方を年長児と一緒にいたり、教えてもらったりしながら関わりをもつようにした。寝かしつけでは、年長児の中にはどう寝かしつけていいのかわからず戸惑っていた子どもも、友達にコツを聞いたりしながらやってみようとする姿が見られた。
- 5歳児は、異年齢交流を始めた頃は、どう接したらいいかわからず、戸惑う姿が見られたが、教師の姿を見て関わり方を真似したり、交流を重ねることで、年下の友達一人ひとりの性格や好きな遊び、その子の特性を自分達なりにかかわりを通して習得し、その子その子に合った関わり方や言葉がけをしようとするようになり、相手を気遣うことが出来るようになった。また、何でもしてあげようとするお手伝いから、自分でするための援助に変わり、出来た時にはしっかり褒めたり、一緒に喜んであげられるようになった。
- 年間を通して異年齢交流を行ったことで年長児が4月頃に乳児部の子ども達に関心を持ち、関わりを持っていた姿が、年中児の2学期の段階で見られるようになっている。

(4) 研究のまとめ

異年齢交流で見られた子どもの育ち

研究の成果

○全体を通して

- ・ 交流を重ねていくうちに子ども達が担任以外の先生にも親しみを感じ、話をしたり、甘えたりするなど、自園の教育の重点である個々の子どもの拠点となる場所や居場所が広がり、安定した関係の中で共に育つ心地よさを感じるようになった。
- ・ 年上の子どもは年下の子どもに頼りにされる嬉しさを感じ、自信に繋がった。また、年下の子どもは、年上の子どもに優しくされ、安心感を感じ、人と関わる心地よさを味わうことが出来た。人と関わる力の育ちの基盤に大きく繋がったと考える。
- ・ 同学年同士では味わうことが難しい役立ち感を味わったり、感謝されたり、認められたりする経験を

積むことが出来た。この経験から、子ども達は自分のよさに気づき、大切にされているという自尊心が育ったように思う。このことは、他の友達に優しく関わったり、思いやりをもったりすることにも繋がっているように感じる。

- 交流するクラスを決めることで、あまり関心を示さない子どもも交流をするきっかけとなり、異年齢交流をする楽しさや嬉しさを味わう機会となった。また、このことをきっかけに、園内ですれ違うと声をかけ合ったり、自由遊びの時間に自主的に行き来する子どもが増えたりし、交流に広がりが見られた。
- 自由遊びの時間に行き来をしたり、遊びを通しての交流だけでなく、生活面での交流を行ったりすることで、交流できる時間の幅が広がり、交流の内容や関わりが広がった。

(5) 課題と今後の取り組み

- 個々の成長には個人差があり、関わりがもちにくい子どももいた。すぐに関わりをもつ様子が見られなくても、育ちや経験を積み重ね、いろいろな人と関わる喜びを味わえるように教師が仲立ちとなりながら実践を重ねていきたい。
- 教師が設定をした交流のやり方では、園児数やクラス数が多く、全園児の子どもが交流をもてる保育の設定の仕方、交流の進め方に難しさを感じた。今後も活動の内容に合わせて交流をするクラスを考えたり、交流の仕方を工夫したりしながら進めていきたい。
- 自由遊びの時間を利用して行った交流では、積極的に交流へ出かける子どもや消極的な子ども、関心の薄い子どもなど様々な姿が見られた。日々の振り返りや子ども達の育ちを考察しながら、自由遊びの時間を利用した交流だけでなく、教師が設定をした交流できっかけ作りも必要と感じられた。今後も様々な形の交流の仕方を考えていく必要があると感じている。
- 年間を通して継続した交流を行うために、運動会や発表会などの園行事の中にも無理のない交流のやり方を考えたり、取り入れたりしていくことが出来ることが分かった。今後も園行事や実態に合わせて交流の仕方や行事のもち方を検討し、保育計画を立て、年度が替わっても途切れることなく交流が行えるようにしていきたい。

2 質疑応答

※アンケートより、質問が多かった内容を抜粋して回答

Qグループの決め方、ペアの決め方は？

A→・クラスの部屋の配置、担任の経験年数に偏りがないかなどを考えてグループを組んでいる。

- 今年度は、2歳・少・中・長から、3クラスずつペアにしたグループを作っている。
- 平成29年度に行ったペアの交流は、担任同士が、日々の様子、こうなってほしい姿など話し合って決めた。交流する中で、無理はできないと感じる時は、変えることもあった。

Q職員間の共通理解、コミュニケーションの方法は？

A→・幼児部、乳児部、合わせて、月に一度、合同職員会を行い、必要なことを伝達している。

- 研究会を行い、その時に、子どもの様子なども伝える。
- 学期に一回程度、幼保合同学年主任会を行い、各学年の様子、気になる子どもの様子、日々の保育、行事、異年齢交流の内容などを話し合う。その内容を各学年会でも伝達をして、つなげている。
- 日々の会話も大切にしている。何気なく一緒になった時に、日常の会話の中で、子どもの様子を伝え合うことを大切にしている。

Q衛生面、安全面はどのようにしているか？

- A→・保育者の立ち位置を配慮している。同じ所にかたまったり、遊びに入り込みすぎて子どもが見えないことなどがないようにその都度確認しながら生活している。
- ・感染症の病気が出た時は避ける。クラスで何の感染症が出ているか、その都度連絡を行い、職員間で共通理解を図っている。子ども達にも、その日は部屋に入れないことを伝える。
 - ・おやつ配膳の手伝いをする時は、手洗い、消毒を徹底、確認している。

Q保護者への異年齢交流の様子の伝え方は？

- A→・学年だより、園だより、参観日での懇談、ホームページなど。
- ・4月の総会の時に、今の子ども様子、取り組みの成果など話をしている。

Q さくら組レストランの活動は、他のグループも同じようにするのですか？

- A→・他のクラスの子どももみんなが同じ遊びをしなければいけないとは思ってなくて、他の遊びの中でもたくさん育つものはある。他のクラスがこの遊びに入るような様子。

Q さくら組レストランのその後、何か発展はしていききましたか？

- A→・レストランが始まる前から、年長のさくら組は、年少のたんぼぼ組によく遊びにきていたが、レストランの後は、たんぼぼ組のこどもがさくら組に行くなど、行き来がより増えた。
- ・たんぼぼ組の中で、レストランごっこが見られるようになり、“いらっしゃいませ”など遊びの中で取得した言葉を自分達の遊びで活かせるようになった。

3 グループ討議



(1～6グループ)

『各園でどのように異年齢交流に取り組んでいますか？

自由時間の交流と教師が設定した保育中の交流はどのようなものがありますか？

また、今後どのような取り組みができると考えられますか？』

【発表グループ①】

○現在行っていること

- ・行事での交流…カレーパーティ、おいもパーティ、七夕、秋まつり、運動会ごっこ、お化け屋敷ごっこ

- 朝の時間での交流…年中、年長のみ自由に行き来をする。朝の受け入れ～年少児の準備、着替えの手伝い。
- 身体測定の手伝い
- 食事での交流…年度末に、年中児と2歳児が交流。
- 遊びの中での交流…園庭。泥遊び、泡あそびなど設定した遊びの中で交流。盛り上がっている遊びを通して自然と集まって関わっている。
- 散歩などでの交流…定期的に散歩。野菜の収穫など。

○これから今後してみたいこと、できそうなこと

- 限られた時間だけでなく、一日通しての日をつくる。
…教室、教師の数など、各園での課題がある。でもやってみたい。生活の中、遊びの中…自由な交流ができる中での育ちを見て見たい。
- 職員間で異年齢の取り組みについての話し合いを増やす。
…これをこうすれば、、できたら、、もっといろいろな子どもの姿が見えるかも。先生たちの思いが見えてくるかも。
- 年長と年中だけの関わりが中心になっているので、関わりを広げていきたい。
- 関わりがうまれるような環境設定や声かけを考えていきたい。

【発表グループ②】

○現在行っていること

- 行事を通して…お店屋さんごっこ、誕生会など
- 自由遊びの中での交流…戸外遊びの時間を同じ時間に設定する。園内を自由に行き来できる環境づくり。
- お世話をするこでの交流…年長と年少児がペアになる。ペアを決めての交流。
- フリーデーでの交流…月に一回縦割りでランチデー会食。一日異年齢で一緒に遊ぶ日。いろいろなコーナー(砂場、制作、ままごとなど)を設定しての遊び。

○これから今後してみたいこと、できそうなこと

- 行事が多い中でも上手く交流していきたい。
- 時間の工夫。積極的に関わりがもてるようにいれていく。
- 散歩交流。
- より密に異年齢の交流をもつために職員間での話し合い。

(7～12グループ)

『行事の中で異年齢をどのように取り入れていますか？』

また、今後どのような取り組みができると考えられますか？』

【発表グループ③】

○現在行っていること

- 園外保育…秋の芋ほり遠足。一年を通して、毎週火曜は、異年齢で園外保育。
- 運動会…年長児が年少児のかけっこの手伝い。入場は年長児と年長児が手をつないで行進。
- 4月の園内めぐり、なかよしパーティからスタートして、年間通して異年齢の交流行事を設定。
- お祭りごっこ。その中で共同制作を行い、お祭りにつなげる。
- お店屋さんごっこ。ペアで買い物に行く。親子バザーにつなげている園もある。
- 端午の節句でこいのぼりのお面を年下の友達にプレゼントする。
- 誕生会。お別れ会。

○これから今後してみたいこと、できそうなこと

- ・わらべうたを通して。遊びの伝承をする。
- ・プール遊びを通して。
- ・遠足での関わりを広げる。
- ・自然体でいきたいので、行事を通してではない方がよいのでは？

【発表グループ④】

○現在行っていること

- ・交通安全教室
- ・避難訓練でペアになって移動、避難。
- ・歯科検診、内科検診を異年齢で行う。年長児のやり方、挨拶の仕方を年下の子が見ているのでスムーズ。
- ・プール遊び。
- ・クリスマス会。お正月会。ひな祭り会。お別れ会。一緒に給食を食べる。
- ・ひな祭りで共同制作。
- ・夏祭りで一緒に踊る。
- ・運動会で、年長児と年少児がペアになって手伝う。
- ・芋掘り遠足。

○これから今後してみたいこと、できそうなこと

- ・みんなで何かを料理して食べる。カレーなど。芋掘りの後に芋を使ってクッキング。
- ・マラソン大会
- ・発表会で、同じシナリオのできる劇など。

4 質疑応答 ※グループ討議の中で出た質疑より

Q 交流で、年長と年少は立場が分かりやすく、交流がもちやすいが、年中はどのような立場で考えたらよいか？

A→年中児の異年齢の関わり方の持ち方に、昨年度、悩んでいたことがあった。年長児は、お世話をして喜び、年少児はお世話をされて喜び。その中で年中児の在り方を考えた。
3学年が交流しても、年中児は入れず、年中同士でかたまっていることがあった。
教師の方が、関わりをもたせようと促すこともあったが、どうしたらよいか分からず、関わりがもてないままのこともあった。どうしようと悩んで、職員間で話をすることもあった。
昨年度、1学期に異年齢で砂場遊びをしたことがあり、年長児がダイナミックに遊びを広げていたが、年中児は入ることができなかった。しかし、後日、年中児が砂場遊びをした時に、年長児がしていた遊びを真似て楽しんでいて、見て真似たことを今度は同じ年中児に教える姿も見られた。
その姿から、今この姿でいいのではないか。今のこの姿を受け止めていったらいいのではないかと考えが変わってきた。その姿を見守って一年間過ごしてきた。

→年中児が年長になると…

年少児の時から異年齢交流をしてきて、年長になって、すごく力を発揮するようになった。
言われなくても、自然と年下の友達の世話をすることができる。4月に新入園児の世話を一生懸命していた。5月、6月と継続し、世話をするだけでなく、待ってあげられるなど、関わり方が変わってきている。今までの継続された経験からきている。

- 何が大事か考えた時に、子ども達が無理なく主体的に動いているか。
ただ、その主体的に子ども達が動く、主体的に子ども達が何かを感じるという前に、教師の意図的な声かけ、働きかけがないと、子ども達が育つのは難しいのではないか。
- まずは、教師が何か仕掛ける、設定保育というのは、教育、保育の上で当たり前。それがなければ、幼稚園、認定こども園ではないのでは。
- 設定すれば、それなりに活動は動く。でも、それが発展していくか、持続していくかということ、なかなかそこまでいかない。でも、今回、教師主体の活動から、子ども達の自主的な活動に。それが教室で起こったり、廊下で起こったり、そういったことに発展していった理由は何か？
- 改めて考えると、教師が、受け入れ、受け止める。それによって子ども達が安心する姿。設定によって、初めての活動で、“はいやってね”と言われて、子ども達は戸惑うのは当たりの姿。初めての活動の中で、知らない人がいて、何かやれと言われてる…。どうしたらいいんだろう…。ただ、それを繰り返していくのがとても大事。
- 今回の、さくらぐみレストランも1回ではなくて、何回も繰り返していくことで、レストランごっこ遊び自体にも慣れていくし、その中で、いろんな子ども達がいることの自然さを子ども達が掴んでいく。そういったことがあるからこそ、設定で感じたこと、経験したことが、他のいろいろな別の活動に影響していく。
- 子ども達が自主的な活動、教室や廊下で、とあったが、実際に数回、園に行ってみた中で、子ども達の自然な異年齢の接点があった。朝の会、通常なら自分のクラスに入っていくが、異年齢がいる中で、朝の会が始まる。今日は違う子がいるということが、自然な形で朝が始まる。そこに子ども達がいることの自然さと同時に、教師が継続して認めていく、受け入れていく、この繰り返しが活動の発展につながっている。
- ※本日の資料 P7~9
年長になると、違うクラスでどんどん関わっている。これは、経験の積み重ねがあるから。年中の関わりは、年長より遅れて出てくる。どうしていいかわからない、戸惑う。そういった気持ちが育っていくのも大事。“異年齢で思いやりが育った”ということばかりではなく、“どうしよう”といった思いの葛藤も大事。それが年長になった時に関わられるようになる。年中児は、戸惑いから始まっている。すぐ上手くいくわけではない。繰り返すことが大事。
- グループ討議では、行事、朝の時間、先生の手伝いなどを通して、いろいろな交流の中で異年齢の関わりがあった。その中で教師が、交流のための話し合いもあった。いろいろな交流が、いろいろな園でできている。後は、与えられた環境、与えられた子ども達の中で。第四幼稚園は、大きい規模の中で、限られた環境の中で、与えられた環境の中で、できる範囲のことを最大限にやっている。その中で何が育っていくのか。人を思いやる気持ち、人と交流する楽しさ、と同時に、葛藤も育っていく。
- 何よりも、教師の戸惑い、気づきのプロセスも大事。今まで幼稚園だった所が、認定こども園になった。0歳から6歳までいる。そこで交流があるような、ないような不自然さ。一方で、普通、自然に交流があってもいい…というような、自然さ、不自然さというものを教師が気づき、それにはどうしたらいいのか、話し合ってきた、いろいろなことが行われてきた、このプロセスも大事。それがあったからこそ、共に育ち合う姿があるのだろう。
- 共に育ち合うというのも、いろいろ“共”があるのだろう。もちろん子どもと子どもはあるが、子どもと教師。教師と教師。これも育ち合うプロセスに入っていく。
- 始めは、設定で構わないし、むしろ、設定で、きっかけをつくっていくのは、幼稚園、こども園の在り方。そこから日常化していくプロセス。設定は設定であるけど、それが日常の中にどう溶け込んでいくか。ちょっと子ども達を見たら、手を差し伸べていた、先生の手伝いをしていた、といったような所まで発展していくには、背景には、教師の力量というのがとても大事。だが、プロセスなので、最初から力量がある

訳ではない。第四幼稚園の先生方、ここにいる先生方、いろいろ、常に検討を重ねている話があったが、とても大事なこと。これは、残念ながら、なかなか消えない。だけど、大事なものは、隣にいる先生と、お互い認め合って、そこで先生同士が積み重ねていくプロセスが大事。

- いろいろな保育形態がある。設定保育が中心である園、自由保育が中心である園、いろいろあるが、今日が異年齢交流を行うためのいいヒントになったのではないかと思ったり、私も実際に目にしているなと思った。発表で、失敗ではないが、これは…と思うようなこともあった。
- 具体的に見たい方は、ぜひ、実際に第四幼稚園を見てください。そういったことが、交流を深めていく。自分の園の発展につながる。
- 異年齢だからと言って、年上の子が年下の子のお世話をするといいことではなくても全然構わない。年下の子が、得意なことがあって、年上の子のお世話をしてもいい。問題は、大事なことは、異年齢がいるということ。0歳から6歳の子がいる。自分とは世代が違う子ども達が、自分の周りにはいるということ。子ども達が気がついていける。そういった保育、教育ができればよい。

